



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	エリアーデとシュタイナーの思想におけるライフサイクル
Author(s)	奥山, 史亮; Okuyama, F
Citation	基督教學, 43, 29-32
Issue Date	2008-09-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46721
Type	other
File Information	43_29-32.pdf



エリアアーデとシュタイナーの 思想におけるライフサイクル

奥山 史 亮

本発表では、M・エリアアーデとルドルフ・シュタイナーの思想的関係について考察する。特に、両者の死生観における親和性に注目することで、エリアアーデが提示する死生観の思想的意義に着目する。

まずエリアアーデが、シュタイナーに対して如何に関心を示したかを確認する。エリアアーデがその学術的著作において、シュタイナーに言及したことはほとんどないといつてよい。しかし、小説や自叙伝、またルーマニア時代のエリアアーデについての評伝を著した Mac Linscott Ricketts の研究等を参照することによって、エリアアーデがシュタイナーの思想に強い関心を持っていたことが確認できる。

自叙伝には、エリアアーデがスピト・ハレット高等学校

校に通っていた当時に、シュタイナーについての関心を共有していたことを契機として、ラテン語教師デレア・ロクステアヌと交友をもつようになったことが記されている。その後ブカレスト大学に入学すると、エリアアーデのシュタイナーに対する関心は一層強くなる。一九二六年には、*Adievali literar si artistk* という文芸雑誌にシュタイナーについての論文を投稿している。この論文は、神秘主義の歴史をグノーシス主義まで遡って概略的に論じたものであった。そこでエリアアーデは、非論理性へと陥りやすい神秘主義者の中にあつて、神秘学のロジック化を行った思想家としてシュタイナーを高く評価している。また、一九二二年の一月から定期的な寄稿を開始していた日刊紙『クヴントウル』でも、エリアアーデはシュタイナーについての論考を発表している。例えばエリアアーデは、一九二七年の九月六日から十一月一六日までの期間に、「精神の旅程」(Inieraria spiritual)と題する連載記事を『クヴントウル』に掲載している。この一連の記事は、主にルーマニアの青年エリート層へ向けて書かれたアフォリズム的なものであるが、そこには当時

のエリアーデの哲学的、文化的問題意識が強く反映されている。その連載記事の一つは、シュタイナー思想についての考察にあてられている。その記事では、シュタイナーとルター、イグナティウス・ロヨラの思想が比較されており、シュタイナーの人智学こそがプロテスタントとカトリックの神学を統合した思想体系であると結論されている。

その他、インドからの帰国後、一九四〇年にブカレストのソチエク社から出版された小説『ホーニヒベルガー博士の秘密』にも、シュタイナーについての言及が確認できる。本書は小説という形式をとっているが、エリアーデの個人的体験に基づいて書かれた自伝的要素の強い作品である。その概要は、故人となった中国研究者ゼレンデイ博士の未亡人から、夫が残した蔵書の整理を依頼された語り手（エリアーデ）が、蔵書整理の過程で博士が宗教的実践によって到達したある秘密を発見するというものである。そこには、ゼレンデイ博士の部屋に入った語り手が、博士の宗教研究者としての資質の高さを窺がわせるオカルト文献のコレクションを発見する

場面がある。そのコレクションには、通俗的なオカルトブームによって氾濫したようなオカルト本や神智学関係の文献は含まれておらず、スウェーデンボリやパラケルススの書物と共にシュタイナーの本が並べられていたと述べられている。この記述からエリアーデは、シュタイナーの人智学を高度なオカルト思想とみなしていたことが分かる。

では、エリアーデはシュタイナー思想の如何なる側面に惹かれたのであろうか。自叙伝の第6章には、青年時代のエリアーデは睡眠時間を極端に減らし、過酷な生活条件にも耐えられるように自己を鍛えることによって、人間的条件を超越しようとして試みたという記述がある。エリアーデによれば、このような試みはシュタイナーに影響されたことであつたという。

睡眠や日常における行動様式に対するこれらの闘争は、私にとって人間的条件を超えることを目指す英雄的試みと対応していた。当時、私はまだこれらの技法がヨーガの根底そのものにあることを知ら

なかつた。しかしヨーガが私の内にある関心を呼び覚まし、それによって三年後に私がインドへと導かれたことが、人間の無限の可能性に対する（若き日の）私の信念の例示と延長に過ぎなかつたということとは十分に考えられることだ。（中略）。中学の最後の二年間に、私が顕著に示したシュタイナーの書物や秘教文学に対する好奇心は他に説明のしようがなかつた（Eliade, *Autobiography I*, The University of Chicago Press, 1981, pp.110-111. 石井忠厚訳『エリアーデ回想（上）』未来社、一九八九年、一五二—一五三頁）。

ここで言及されている、ヨーガ研究へとやがて展開されてゆく人間的条件の超克というエリアーデの試みとは如何なるものなのであろうか。エリアーデはヨーガを、人間を有限なものとして制約している諸条件から解放することを目的とする宗教的技法と理解していた。エリアーデによれば、人間に課せられた最大の条件とは、人間は不可逆的な時間の中に存在しており、いつかは死ぬ

運命にあるということである。従つてヨーガとは、時間から脱出すること、死を克服することを目的とする宗教的技法だとエリアーデは考えたのである。自叙伝の記述から理解する限りでは、青年時代のエリアーデの関心は、ヨーガ研究における学的関心と同質のものだと考えられる。よつて、青年エリアーデをシュタイナー思想へと導いた要因は、人間の条件である死と如何に対峙したらいのか、死を越えて生きる道は存在しないのかという問題関心であつたと考えられる。

一般に、エリアーデによる死に対するこのような関心は、「ミオリッツァ」に代表されるルーマニア・フォークロア研究に顕著に示されているといわれる。「ミオリッツァ」とはルーマニアに古くから伝わる叙事詩であり、仲間に殺される運命にある羊飼いが、自らの運命を予め知りながら、死を宇宙に統合される過程とみなすことで、自らの運命を静かに受け入れることを謡つたものである。エリアーデは、羊飼いの死に対する態度は、生を諦めたものでは決してないと考える。羊飼いによる死の受容は、世に存在する不条理や苦難に対して与えられ

た力強く、独創的な返答なのであり、自己の不幸を個人の歴史的な出来事ではなく秘蹟的神秘として受容するものだとエリアーデは解釈している。

従来の研究では、このような死の観念は、レジオナル運動へのエリアーデの関与という問題において取り上げられることがほとんどであった。それらの諸研究の概要は、死を賞讃するレジオナル運動と死をイニシエーションとみなすエリアーデの死生観との親和性を指摘することにより、エリアーデがファシズム運動の暴力を正当化したと主張するものである。しかし確認してきたように、エリアーデはレジオナル運動に関与する以前から、死を超えて存続する生命に関するシュタイナー思想に強い関心を示していた。そしてその問題関心に導かれて、エリアーデはヨーガやルーマニア・フォークロアにおける死生観を研究するようになったと考えられる。従って、レジオナル運動における死の賞讃による暴力の正当化という問題のみにエリアーデの死生観を収斂させて評価することは、それをもつ多様な諸側面を捨象することになるのではないだろうか。エリアーデの死生観

は、より広い思想史の文脈に位置づけることで、様々な解釈を可能とする多面性を有していると私は考える。